

P1-001

医療機関への受診を契機にネグレクトを疑い、子育て支援へ繋がった症例

秋山 実季¹、高見 尚平²、藤代 隼²、岩崎 美和³

¹東京大学医学部附属病院 総合研修センター

²東京大学医学部附属病院 小児外科

³東京大学医学部附属病院 ファミリーサポートチーム

【はじめに】

医療機関では虐待に早期対応するために、虐待のリスク要因を持つ家庭に気付くことが重要であり、厚生労働省の「子ども虐待対応の手引き」にも明記されている。今回、小児外科への受診を契機にネグレクトを疑い、地域の子育て支援に繋がった症例を報告する。

【家族背景】

母は実父と離婚しており、児の親権を持つ。A県X市に住民票を置いていたが、実際はパートナーと児と3人でB県Y区に生活していた。

【病状要約】

生来健康な3歳男児。発熱したため近医を受診し、自宅療養となっていた。第3病日に腹痛が出現し、症状は増悪傾向であったが再受診はしなかった。第9病日にパートナーが母を説得して前医を再受診し、当院救急外来へ紹介受診した。腎膿瘍と診断し、緊急入院の上、緊急腎瘻造設術が施行され、1か月後に退院した。体重は入院時-1.5SD、退院時-0.9SDであった。

【当院での介入】

入院時、児は医療者への警戒心が強く、視線を合わせようとせず、接触しようとするのを小さく丸めて嫌がり、検査時には足を大きく震わせていた。一方、母は痛がる児にたいして無関心であり、情緒的な関りも見られなかった。母の受け答えは辿々しく、治療説明に対する理解も乏しいため、治療の同意取得が困難であった。母子の様子に気になる点が多いこと、再受診までに1週間以上空いていたことからネグレクトも考慮し、複雑な家族背景と併せて家庭支援が必要と考えた。そこで当院で虐待の対応を含めた家庭支援を行うファミリーサポートチーム(以下FST)へ介入を依頼した。入院後、の意思決定をサポートするため、FSTが仲介となり母とパートナー、他親族を交えて検討した。退院後、パートナーの住むY区へ退院することになったので、X市児童相談所(以下児相)に子育て支援体制の聴性を依頼した。X市の児相とY区の児相が連携のもと、Y区児相、Y区子ども家庭支援センターが母子を見守る環境を整えた上で退院となった。

【考察・課題】

親が適切な受診行動をとることが難しい場合、本症例のように重篤な状態で発見されることが多い。3歳健診以降から小学校就学までは、集団に属していない児の状態を直接的に把握できる機会が少なく、より発見が遅れる可能性が高くなる。医療機関が虐待リスクの高い親子を早期に地域へ繋げる役割を担うために、医師は診療の中で虐待・ネグレクト及び転居などのリスク要因を念頭に入れて養育環境を把握する必要がある。

P1-002

異物誤飲患児の、誤飲物による虐待リスクの違い

野村 隆之介

東京大学医学部附属病院 総合研修センター

【背景】

児童虐待相談対応件数は毎年増加している。厚生労働省は、発生予防の観点から、虐待に至る前の「気になるレベル」で適切な支援が必要であるとしている。当院でも平成22年に虐待対策委員会を設置、28年に虐待対応マニュアルを整備して以降、委員会への相談件数は年々増加している。中でも外因性疾患症例の相談が増えており、直近の平成28年4月～31年2月に着目すると、その内訳は、頭部外傷28件(39%)、異物誤飲13件(18%)の順に多かった。本研究では、虐待に至る前の「気になるレベル」の対象を異物誤飲と捉え、委員会に相談があった異物誤飲の患児の虐待リスク因子について検討した。また、誤飲物による虐待リスクの違いについて比較検討した。

【方法】

平成28年4月～31年2月に委員会に相談があった異物誤飲患児を対象とし、診療録を後方視的に検討した。得られた臨床データから、厚生労働省の子ども虐待対応手引きにおける「虐待に至るおそれのある要因」を参考とし、「子ども側」「保護者側」「養育環境」に分けて「虐待リスク因子」を抽出した。発表に当たっては当院倫理委員会の承認を得た。

【結果】

異物誤飲症例は13例で、年齢分布は0～5歳(中央値1歳)、性別は男児が6例、女児が7例だった。誤飲した異物は、薬剤が6例、煙草が2例、電池が2例、コイン、アルコール、お弁当のピックがそれぞれ1例ずつだった。13例全て初発症例であり、入院加療を要したのが4例、経過観察のみが9例だった。虐待リスク因子については、「子ども側」として、体重増加不良が1例、低出生体重児が1例、早産・極低出生体重児が1例あった。「保護者側」として、医療につながっていない身体疾患を有する親が1例あった。「養育環境」として、転居直後でありかかりつけ医がいなかった例が1例あった。薬剤・煙草等を誤飲した急性中毒群(9例)と、電池・コイン等を誤飲した消化管異物群(4例)に分けると、虐待リスク因子は前者で5/9例に認められたが、後者では0/4例であった。

【考察】

委員会に相談があった異物誤飲患児には虐待リスクが見られた。統計学的に有意な差ではないが、急性中毒群は消化管異物群に比べて虐待リスクがより高い可能性がある。

【結語】

乳幼児の異物誤飲は虐待に留意すべきである。特に薬物誤飲・煙草・アルコールといった急性中毒の場合、消化管異物に比べて、より留意してよいと思われる。